

アメリカザリガニ防除による低密度管理でゼニタナゴ生息池の二枚貝と水生昆虫を復元

シナイモツゴ郷の会 長谷川政智・高橋清孝

淡水魚のタナゴ類は、絶滅危惧に指定されている種が多く全国で生息地が10箇所以下となったゼニタナゴもその1種である。タナゴ類はこれまた減少著しい二枚貝に産卵する。シナイモツゴ郷の会が保全している大規模ため池ではタガイという二枚貝に産卵する。秋にタガイに産卵された卵は、孵化して翌年の春まで仔魚の状態となってその中で過ごす。ゼニタナゴの繁殖の

過程には二枚貝が必要となる。タガイなど二枚貝の繁殖は、グロキディウム幼生を水中で放出し、その幼生はハゼ類などのヒレなどに一定期間寄生して過ごした後、魚から離れ水底で成長を始めることが知られている。したがって、ゼニタナゴが繁殖するためには二枚貝が、二枚貝が繁殖するためにはジュズカケハゼなどハゼ類の魚が不可欠である。これらの複雑な関係が原

因して、ゼニタナゴ等在来のタナゴ類の大半が危機的狀態に陥っている。当会の保全池ではヨシノボリ類とジュズカケハゼが生息し、これら2種のヒレなどにタガイのグロキディウム幼生が寄生する。



さまざまな大きさのタガイ 2024年8月17日撮影



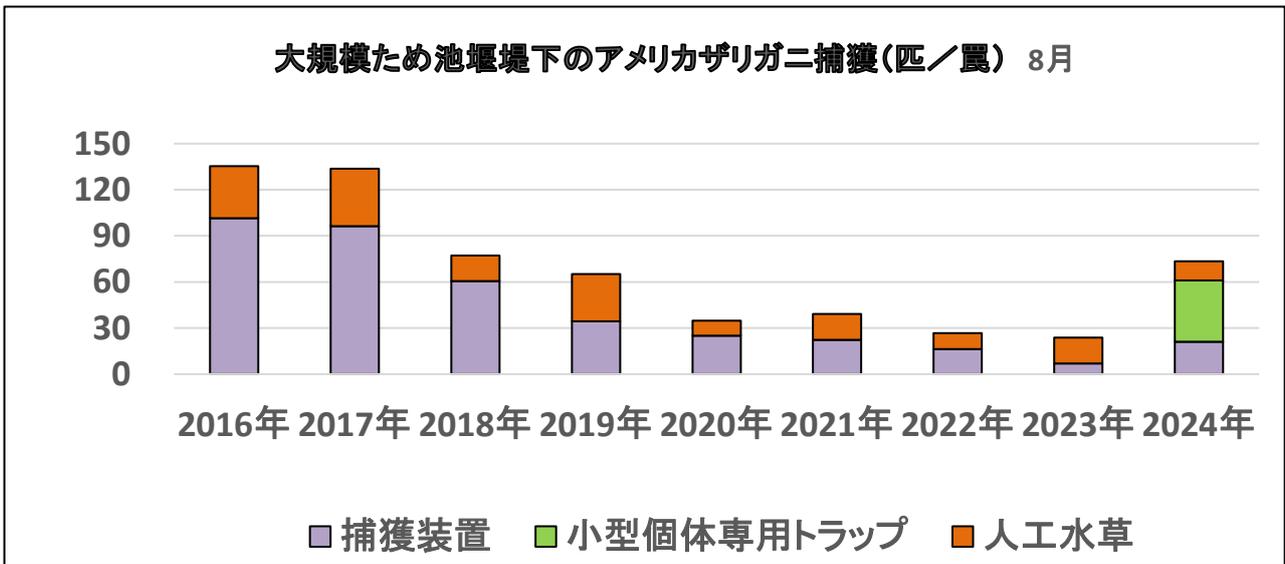
ジュズカケハゼに寄生したグロキディウム幼生



捕食されたタガイの幼貝 2024年9月16日撮影

一方、アメリカザリガニは、魚類の卵や二枚貝を捕食しさらにはその生息環境も悪化させる。保全池でもアメリカザリガニの大繁殖によってタガイや魚類が大きく減少し2013年には、大規模ため池でタガイとゼニタナゴが確認できなくなった。二枚貝と魚類の復元のためアメリカザリガニの駆除を開始し2014年から本格的なアメリカザリ

	2014～2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2024年	2024年
調査月日		8月21日	3月26日	3月19日	3月18日	8月17日	10月21日
個体/時間・人	0	134	56	123	217	750	96



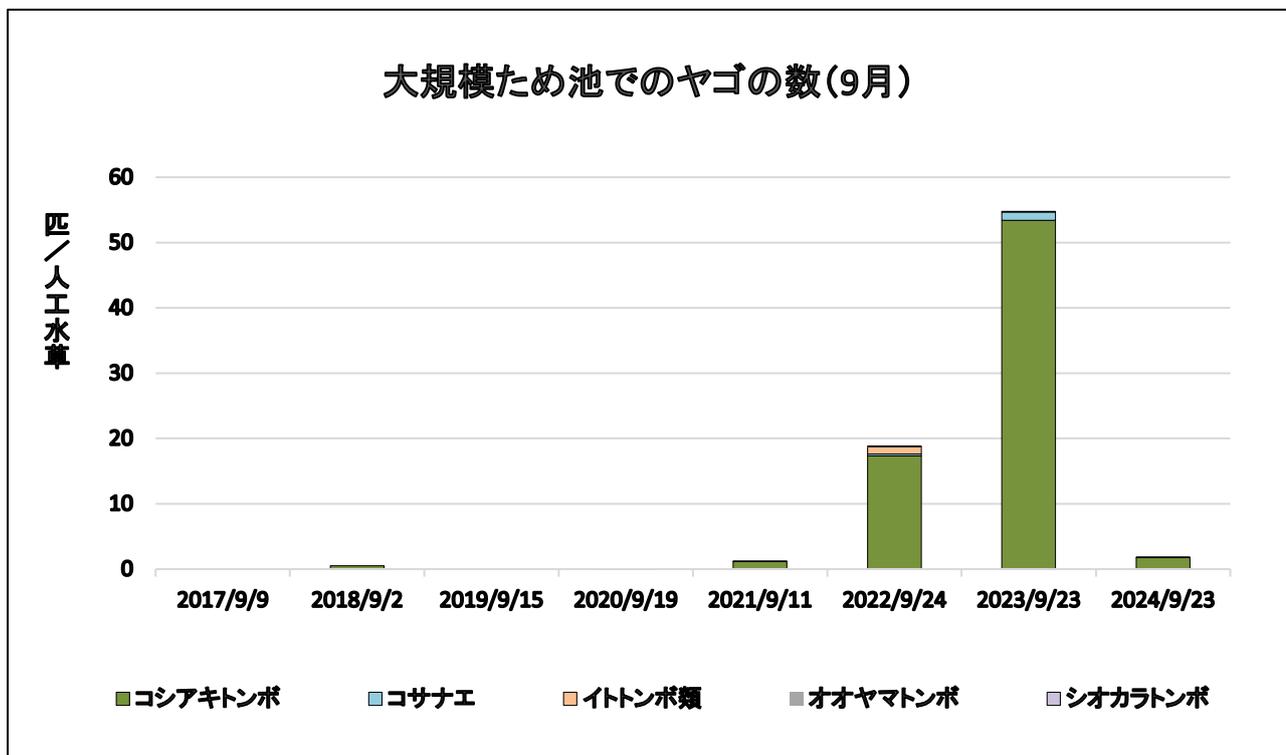
ガニの駆除を開始した。また、大規模ため池には駆除と並行してタガイの移植も行った。その結果、2021年以降タガイを採取し確認できるようになり、2022～2023年には幼貝が多数採取され2024年も個体数の増加が確認できた。しかし、2024年はアメリカザリガニが異常繁殖して小型ザリガニが増加し、夏には幼貝の捕食が見られた。6月以降、小型ザリガニ専用トラップを増設し捕獲圧を高めたため、アメリカザリガニの平均捕獲数は大きく減少した。

タガイの増加が確認された2024年だが9月以降、大量の斃死が確認された。その多くは大量繁殖したゼニタナゴ過剰産卵が死因と考えられる。一部、産卵数の少ないタガイの個体も見られるためその死因は良く分からない。水生昆虫もアメリカザリガニの影響を大きく受けている。

大規模ため池では2020年までトンボの幼虫ヤゴを確認することが稀だったが、アメリカザリガニの捕獲数の減少に合わせ2021年から増加し、2023年には大きく増加した。しかし、2024年はヤゴの確認数が大きく減少し、

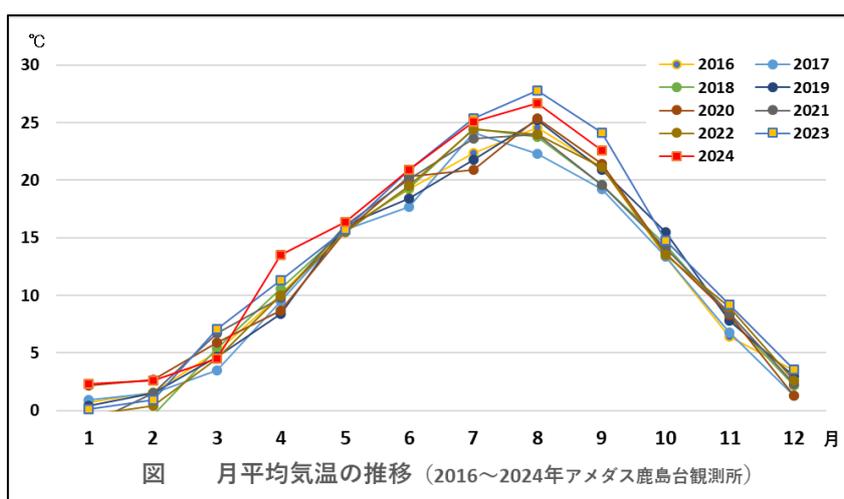
2021年の水準に戻ってしまいました。減少原因としては異常繁殖したアメリカザリガニの食害による影響が大きいと考
 えている。

2023年4月～2024年9月までの月別平均気温は、これまで見られなかった程、異常に高く推移した。このこと
 が大きな要因となって、温暖な気候を好むアメリカザリガニの繁殖を促し、貝類や水生昆虫の食害を拡大したと考



えられる。同時に、冷水性の水生動物の生残にも少なからず影響した可能性がある。

これまでの保全池における防除
 活動により、ゼニタナゴや貝類な
 ど多くの水生動物が増加してい
 る。しかし、温暖化による影響は
 拡大しつつあり、特にアメリカザ
 リガニは繁殖力を強めることが予
 想され、新たな低密度管理の手法



が求められている。当会は小型ザリガニ専用トラップの適切な利用などにより低密度管理を着実に続け、同時に在
 来種の動向をモニタリングしながら必要な保全策を講じていきたい。